



## 人を舐める犬の出現

——インドネシア・中部フローレス  
における犬—人関係の変化——

杉島敬志\*

今夏、3年ぶりにフローレスを訪問した。調査地を訪れる間隔があくと、いろいろな変化がおこっていて驚かされるが、以下ではそのひとつについてのべる。

ティモールからフローレスのマウメレ市に到着した日のことである。知人宅の居間のイスに座り、ようやく涼しくなった夕刻のひとつきを過ごしていると、つま先に何かがふれた。ビクッとして下を見ると、子犬が足を舐めていた。ほとんど反射的に（しかし意図的に軽く）わき腹を蹴ると、子犬は大げさにキャンと言って逃げていった。

弁解がましい口調になるが、私は犬好きの人間であり、犬を愛玩する方法も十二分に心得ている。しかし、中部フローレスの調査地で犬を可愛がったことはない。調査地の住民にそんなことをする者はひとりもいなかったし、重大な禁忌に違反することがあってはならないとも考えていたからである。犬を人間のように処遇することは、近親間の性関係同様、おかしてはならないタブーのひとつなのである。つぎのような神話の一節は、このことを明言している。

遠い昔、島の南岸にラウターという村があった。ある日のこと、囲炉裏の火が消えていることに気づいた女が、大声で隣家に火だねを求めた。あいにく隣家には使い走りをする子どもがいなかった。それに少しまえから雷鳴がとどろき、雨が降りはじめていた。そこで、隣家の者は、犬の尻尾に火のついた薪を結びつけ、犬をよびよせるように女にいった。よばれた犬は、雨のなかを走り、火だねを運んでいった。

すると雨は急に激しくなり、豪雨にかわった。そして滝のような雨が天から降りそそぎ、ほどなく洪水が村をおそった。すさまじい雨のために、海の水があふれ、ラウター村をのみこんだのである。村人たちは、近くの山にのがれようとしたが、彼らの大半は溺れ死んだ。

このようなことがおこしたのは、犬を人間のようにあつかい、使い走りをさせたためである。だから犬に用事をいいつけることは、かたく禁止されているのである。ラウター村が沈んだところに舟を漕ぎ出すと、いまでも海の底に石積みの方円形広場や、その中央に立つ石柱などが見える。

こうした天変地異は、近親相姦をおかすことによっても生じるとされ、当事者の男性が難をのがれるために慣習法上の首長にさしだす財物は「天を支え、月を押しあげる」とよばれる。また、中部フローレスでよく知られている創世神話によると、この世がはじまるまえの始原の世界は、レペンブス山の頂をのぞき、海の水でおおわれ、天は手がとどくほど近かったといわれる。それゆえ、この世の出発点は、天と地が遠くはなれ、海から陸が分離したことにあるのである。これらのことを考えあわせると、犬を人間のようにあつかうことの危険性があきらかになる。それは、この世がはじまる以前の混沌に世界を逆行させてしまうほどのあやまちなのである。

中部フローレスに住む多くの人々にとって、犬は、家の内外をとわず、たえず人の近くをうろつく、もっとも身近な動物でありつづけてきた。しかし犬に対する人々の態度は気ままな放任主義といえるものだった。人が犬の行動に干渉するのは、犬が不都合な事態をひきおこしたり、ひきおこしつつある場合にかぎられた。つまり、盗み食いを

\* Sugishima Takashi, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科；Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

したり、うるさく吠えさわいだり、じゃまで目ざわりな場合である。そんなとき、人々は蹴る、棒でたたく、石をぶつけるなどの方法で犬を追い払う。それゆえ、食事は犬との「大立ち回り」で、一再ならず中断されることが多い。

フローレスの犬も、犬である以上、しつけをすることは可能であり、そうすることで犬をめぐる日常生活のわずらわしさは大幅に軽減されると思うが、しつけはおこなわれたためしかなかった。これはおそらく犬を人間と同列にあつかわないようにしていることの一環なのだろう。

だが、犬と人との関係はかわりつつあり、犬を可愛がって育てる者が都市住民の若年層にあらわれはじめている。マウメレの友人宅の子どもたちも、犬を愛玩している様子であり、毎日のように犬をなでまわし、たんねんにノミをとってやったり、犬とかげっこなどをして遊んでいた。また、何匹かの犬には、連続テレビドラマの主人公や登場人物にあやかり、「イサベラ」などの名前がつけられていた。このような環境のなかで育つ犬が、いきなり痛い目にあわされる可能性を考えなくなり、人に親しげに寄り添い、足などを舐めるようになるのは当然だろう。しかし、こうした犬との関係のありかたは先にのべた禁忌をおかしかけている。

友人宅に滞在していたある日、居間で犬とたわむれる子どもたちに、海に沈んだラウター村の話をまじえながら、犬と人とのあるべき関係について話してみた。私の話をきく彼らの態度は、反抗的ではなかったが、関心をもっていないこともあきらかだった。そこで私は、「イサベラだけはぜったい人にやらない」といていた子に、「犬に名前をつけることも本来は禁止されている」と、ホラをまじえながら、彼の反応をひきだすべく圧迫をくわえてみた。しかし、その子は黙って下をむいているだけだった。そこに助け船を出したのは学校の先生をしている友人であり、彼女は、犬を可愛がって育てると、私たちがやってくるのを遠くで見つけ、尻尾をふってむかえてくれるようになる、というのだった。この言葉から推して、彼女

自身が犬の新しい飼い方を受け入れ、そこに問題がないことを子どもたちに保証しているのである。

こうした現象の背景にある大きな原因のひとつは多チャンネル化したテレビだろう。テレビをとおして、とくに都市の住民は、犬をペットとして愛玩する人々が世界には大勢いることや、人間の命令を犬が忠実に実行するありさまを知り、このような犬と人との関係が天変地異をひきおこすころか、不都合なく成立していることを確信するようになったにちがいない。ここまで書いてきて思い出したが、2003年の調査の際、牧羊犬のコンテストをテレビで見たらしい村人が、驚きをまじえながら、人間の命令にしたがって働く犬のありさまを長々と話してくれたことがあった。

中部フローレスにおいて、犬は豚や山羊などとおなじように、食肉用の家畜として屠られ、ひんぱんに食されてきた。犬をペットとして飼うようになった子どもたちは、犬肉を食べたがらなくなるにちがいない。また、近い将来、犬肉を忌避する者さえあらわれるかもしれない。だが、犬の新しい飼い方が従来からの犬と人との関係にとってかわるようなことはないだろう。犬を愛玩する都市住民の態度を嘲笑したり、犬をペットとして飼うことに異議をとなえる者が中部フローレスには、まだたくさんおり、多数派をめているからである。つまり、村における犬の飼い方に大きな変化は見られないのである。

近年、犬をペットのように愛玩する者が中部フローレスで急増した事態を、この文章では「変化」という言葉で表現した。こうした「変化」の用法はよく見かけるし、その意味でまちがいはない。しかし、「変化」には「ある状態から他の状態になること」という意味があり、この意味での「変化」は単線的な変貌、変換を含意しがちである。しかし、本稿でのべてきた変化は、より正確には「追加」とでも表現されるべきである。家畜としての犬の飼育にくわえ、犬がペットとして飼われるようになったのであり、このような意味での追加は、既存の状態を変化させるとはかぎらない。